

愛すれどいのち哀しく

くさ なき みのる みち こ
草薙 実・紀子

愛すれどいのち哀しく

くさ なぎ みのも みち こ
草薙 実・紀子

立風書房

愛すれどいのち哀しく



昭和49年10月15日 第1刷発行
昭和50年1月15日 第4刷発行

¥ 620

愛すれどいのち哀しく

著者	草薙 実
発行者	草薙 紀子
	下野 博

発行所	株式会社	立風書房
-----	------	------

東京都品川区東五反田3-6-18

電話 447-1191 (代表)

〒141 振替東京 74493

印刷所 信毎書籍印刷
美術版西社

落丁・乱丁本はおとりかいたします

©M. kusanagi 1974



結婚直前の紀子さん。生前、彼女がもっとも気に入っていた写真である。



わたしたちは、この結婚が、あとにつづく人たちのみちしるべとなり、ひとすじのあかりとなることを祈りながら、そのさががけとしてのいばらの道を、たがいについて、はげましあって、しっかりと愛の証人としての足どりをたしかめてまいります。

へちまいのことばより

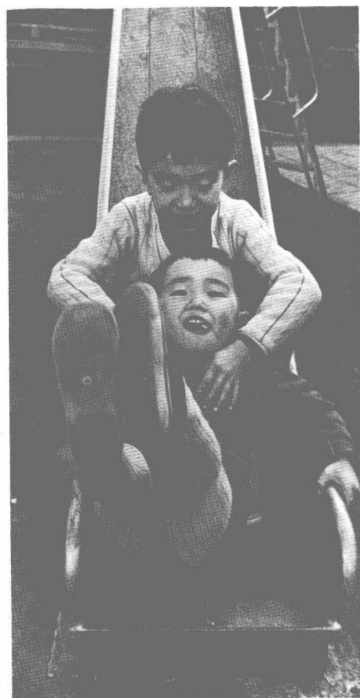
一九六五年七月十三日、二人は全国の人々が見守るなかで、テレビ結婚式をあげた。紀子さんの結婚は、同じ病に苦しむ人々の、大きな「希望」だった。

最初の手術（一九六二年）を終えて、退院した日、
「大明神」と紀子さんが呼んでいた服部先生と。



結婚の翌年、近くの公園で。間もなく、妊娠を
知らされ、二人は大きな試練に立たされる。





母の死にもめげず、のびのびと育つ純君と響ちゃん。



「奇跡」と言われた出産の大役を果たし、見つめ合う二人。

ママのおもいで
一年一くみ
くさなぞじかん
ママは、しんどうのしゅじゅつのおあと、しんでしまっ
たけれど、いつもぼくの、こ
ころのなかでいきている
んだ。ぼくは、さびしくな
い。きょうちゃんとなかよ
くしていきます。ママもし
んばいしないでね。

純君が、母の死によせて
つづった作文。(左)

ママは、しんどうのしゅじゅ
つのおあと、しんでしまっ
たけれど、いつもぼくの、
こころのなかでいきている
んだ。ぼくは、さびしくな
い。きょうちゃんとなかよ
くしていきます。ママもし
んばいしないでね。

目次

プロローグ

男のだいどこ……………	10
父と子のメルヘン……………	16
お墓って高いの?……………	23

第一部

掘り出しもの……………	32
たとえ貧しくても……………	46
バチンコ……………	55
タオルの赤ちゃん……………	62
ふるさと浦河……………	65
受胎告知……………	76
この命にかけても……………	80
名まえは「純」……………	87
出版記念会……………	98
奇跡の子……………	103
第二部……………	
しあわせの天使……………	112

パパの育児学	115
命のカード	121
「純愛」夫婦	132
再び	136
父の死・子の誕生	143
純と響	158

第三部

まつり	174
最後の晩さん	178
家へ帰りたい	184
追憶のなかで	199
永訣の朝	204
手術室	214
ママ、死んじゃだめ	218
ママはいつ帰るの?	229
紀子、その死	236
おわりに	243

裝幀・馬越純一郎

愛すれどいのち哀しく

プロローグ

男のだいどこ

——ン！

はっと目ざめ、となりのふとんに、そろりと右手をさし入れ、お尻のあたりをさぐる。

——やったァ！

はじかれたようにはね起きた。無念！ 手おくれである。カーテンをすこしひき、空を見る。あいにくどんよりと曇って雨模様。日さまははまだ三時にもならない。

——ふとん、乾かないなあ……。

ナイト・ガウンを着て、ふとんにあぐらをかき、一服つけ、うんざりした気分、響きようの顔をのぞく。

——いい気なもんだ！

豆電球のはのかなあかりで、こどもらの寝顔は、おほろにかわいい。

響きようはそろそろじぶんの失敗が、身にこたえて来たのだらう。枕をはずれて、安全地帯のおにちゃんおにちゃんの寝場所

へにじり寄って、干しえびみたいにからだを丸め、しがみつくような格好かっこうして寝息をたてはじめた。

このままでは、風邪かぜをひく。

——響きようベエ！ さ、起きて、パパだよ！ 寝巻取りかえなくっちゃ。

肌着とパジャマをたんすから出し、まだ夢の続きを見ながら立っている響のからだを拭き、手早く着がえをすませ、パパのふとんに移して寝かせた。

冬の夜更けは、ひどく寒い。つめたくなった響のからだを抱いて、あたためながらパパは眠った。ひと晩に、二度まで災難さいなんは来ない、そう確信して眠った。

パパは、すてきな夢を見ている。

ママではないらしいが、だれかわからないけど、とてもきれいな女のひとと手をつないで、広い広いお花畑のなかを、はばたくように駆かけている。あつたかい春の陽ざしを受けて、花たちはまるでじゅうたんみたい。

——あッ！

調子づいたパパは、うつかり池みたいな水たまりに落っこっちゃった。

——あれッ。なんだかなまぬるいみたい。

連れの女のひとに、そう言った途端、パパは夢から放り出された。

——シ、しまったァ……

何ということだ！ あのとときトイレに連れて行けば何ということもなかったのに、響のタンクには、まだかなりの水量が貯蔵されていたのだ。さて、困った。もう、「川」の字型には寝られない。被害の及ばないふとんの下のほうに、「三」のように避難して、三人の男たちは肌くっつけあって、また寝た。

うらの竹やぶで、雀どもがやけにうるさい。たぶん女ばかりだろう。日曜の朝みたい、ゆっくりめざめたあと、さすがに気分がいい。

——休みだったかな。

ずいぶん睡眠をとったような気分だったので、とっさには何曜の何時ごろなのか見当もつかない。

——いっけねえ、月曜だ。

えらいこっちゃ、定刻一時間オーバーの寝坊である。とび起きて台所へ走り、湯をわかす。かねてより、こん

な非常時に備えて買っておいた、食いものの品目、つぎの通り。

カップ入りラーメン

カップ入りワンタン

インスタント・コーヒー・スूप

いずれも、まともに飲食出来るしろものではないが、こういう急場にいたっては理屈を言っていられない。いずれも熱湯さえあれば、すぐできる。これをガキに食わせよう。

——パパの料理は、みんなすこしまずいね。

兄の純は、パパの料理の腕前を、平気で批判するから、けさの献立では悪くすると召しあがっていただけないかも知れない。よし！ それなら例の手を使おう。純と響の大好物、黄色く熟したバナナを三本、食卓にならべた。

——ゼーんぶ食べたら、このバナナ食べていい。

——ヘーッ！ こんなまずいラーメン、食べられないや！

そら来た。案のじょう、純は大いに不服らしい。日ごろ、一杯百円のcantrier・ラーメン（これはパパの会

社の製品）を食っているから、即席もののまずさは百も承知である。全然、手をつける気もない。とは言いがら、何とかまずいものを食わずに、バナナへとびつきた魂胆だ。

だが、パパの目が光っているから、そう簡単にズルは出来ない。

その点、弟の響は素直だ。パパにさからっても勝ち目はないから、景品のバナナを上目づかいにためまわしながら、一目散にスタート！ 兄より先にゴールすれば、ひょっとすると二本ありつける勘定になる。そう思っているラーメンをすすると、何やらほのかにバナナの香りが出て、いきおいづく。

横目で冷ややかにそれを見ていた純も、こうなつては意地ずくでも負けられない。弟に二本も食われてなるものか、それっ、スタート！ だが、六歳と三歳では、あいた口のサイズが大幅ちがう。

遅れをとった兄は、またたく間に弟に追いつき、ほとんど同時にゴール。さっと四本の手が伸びた。

——待った！

これは純、こっちは響、とまず二本を分配。問題は、

あと一本の所有権だ。ふたりとも、のどから手が出ている。

——これは、パパの！

——ちえっ！

知恵でも腕力でもパパに及ばない純が、したたかなうらみをこめて放つ長嘆息で、変なアクセントをつけ、妙に長々しく発音する。パパの負けである。

皮をむいて慎重に二分分し、ふたりにわけ与えたが、純は腹の虫がおさまらない。

——ボクのほうが早かったのに、どうして半分しかあたらないの？

——人間は、みんな平等！

——へえっ！

いつものパパは、五時から五時半までのうちに起きる。

——響ベエ。おしっこないか！

たまっていそうなら、放出。大丈夫なら、朝までもたせる。

カウンの上に、冬ものの背広をひっかけ、石油ストー

ブに点火。底冷えがするから、なかなかあたたまらない。

湯をわかし、茶をいれる。まずは、ひとくち。ほんのわずかなひとときだが、パパひとりのぜいたくな時間がはじまる。

ソファに足を伸ばし、毛布をかけ、手近な本の山から二、三冊抜き出して、今晚の読書計画を練る。

「革命の序幕」

「百姓一揆の伝統」

「日本の救貧制度」

時間をもったいないから、文学書は見ない。そのかわり、「ブラック・ユーモア傑作漫画集」とか、「いとしのパパ象は空を飛んだか」のような詩集を、必ず一冊加えておく。

学者の文章は^{おおきく}大味なのが多いから、大人のマンガや詩集などを香辛料にするわけである。

パパの読書は、さしあたってすぐ必要な〈育児の百科〉や〈百円で出来るおかず一〇〇種〉をのぞいて、たいてい遠大な目的を持ったもので、見たところは気まぐれである。それぞれの著者が考え抜いて構成した本

を、いったんバラバラにして、パパなりに組みかえて読む。

だが、いまは朝。ていねいに読んでなどいられない。三冊の目次をひろい、読む順序だけ決めてから、「あとがき」に目を通しておく。これだけの間に、たばこ三本、お茶三杯いる。あたりが、そろそろ白みかけて来る。寒い朝である。

午前六時半、いよいよ^{せんちう}戦闘開始！

まず、ごはんである。自動炊飯器なんかない。結婚したときに買った釜で炊く。とくに柄が取れてしまったが、使えるうちは捨てない。煮えてくるまでに、味噌しるの用意をする。かつぶしをかき、こんぶに切れ目をつけ、だしをとる。

目についた野菜をトントんきざむ。ご近所からも似たような音がして来る。

香ばしい味噌のかおり。釜鍋から立ちのぼる湯気。茶わんのカチャ、ガチャ。台所に、くらしの活気がみなぎって来る。

ごはんの火を弱め、味噌しるをおろし、やかんをかけ、テーブルに食器を運ぶ。パパの書斎兼食堂はすっか

りあったまっている。

音やにおいで、ふたりの子たちは、朝になったことに気づいているが、ふとんにもぐって、まだ起き出さない。パパの命令待ちである。

——おはよう！ さ、野郎ども、朝だぞ！

バカでかい声で、ただ一発でふたりとも起こさなければならぬ。ママみたいに五分も十分もかかって起こすのは、第一甘いし、気合が足りない。

こどもたちは、風圧ではじき飛ばされたように、とび起きる。

——パパ、おはよう。

——おはよう、パパ！

ようし、けさはどっちも動きがいいな。起きかたのよしあしを見て、パパはふたりの健康診断をする。ぐずぐずしていれば、一日の生活サイクルのリズムに乗れない。忘れもの、交通事故などに気くばりして、気持ちを引きしめてから送り出すよう、心がけている。

——というのが、寝坊しなかった時の日課のはじまりなのだが、けさはそうも言っていられない。即席ラーメンと



母親はいなくても、純と響は元気いっぱいだ。

一本半ずつのバナナをたいたら、即席コーヒを飲んでいる子らの頭ごしに見える時計は、もう七時四十八分。えらいこっちゃ！

——パパ、顔！

——ゆうべお風呂へ入ったんだから、口のまわりだけ拭